

この歓ばしき開設

東京大学名誉教授 寺崎 昌男

開設までのプロセスで最も嬉しかったのは、出身者・交友の方たちから陰に陽にさまざまな支援があったことである。もともと、学園に新施設をつくるというような作業は、教員だけでできることではない。準備委員会の段階から職員の方たちの参加が不可欠だった。準備と発足には幾人もの同窓の教員が加わられたが、努力を惜しまれなかった職員の方たちもまた同窓生であり、惜しみなく努力を傾けられた。

歴史資料館すなわち学園のアーカイブスは、本校出身者の心のよすがとなる。母校への懐かしさを支えてくれる。しかし現在の日本の大学では、意義はそれだけではない。一つは、いま私学に最も強く求められているのが、建学の精神や個性や伝統であり、それを学内外に表明するという使命がある。二つは、それらを根拠づける学術的な歴史資料を収集・保存・公開するという役割がある。これらは、他の施設では実行できない。

建学以来の歳月の間に、大学・学園が選び取ってきた理念や方針、実態は、善なるものばかりではない。どの大学・学園にも過ちや迷妄が含まれる。その実際を語り、反省の基礎を提供するのも、歴史資料館である。他方、大東を大東たらしめた奮闘や栄誉も公開・展示される。大学・学園を最も大学らしく学園らしくするのがこの館の役割であり、世界中の大学がアーカイブスを持っているのも、それを目指すからである。このような大事な施設の開設に踏み切られた経営陣にも、心から敬意を表したい。

(歴史資料館運営委員会委員、立教学院本部調査役)



大東文化歴史資料館の設立経過について

教育学科教授 荒井 明夫

「学園関係資料の収集・整理・保存と展示などによる活用」「百年史編纂」「大東文化学園・大東文化大学史の講義」という3本の柱を軸にした大学アーカイブスの設立に向けて、須藤敏昭前学長・竹内哲夫前理事長の御協力の下、2004年6月設立に向けたプロジェクトチーム第一回会合を開催することができた。チームは、早速成蹊大学・明治大学、8月には京都大学・同志社大学・関西大学・神戸女学院大学のアーカイブスを訪問する、など精力的な活動を展開した。

他大学の見学から学んだ最大の教訓は、大学の個性がアーカイブスに現れているということ。いいかえるとアーカイブスの設立こそ大学の個性の確認・大学の個性の発揮にほかならないということだ。チームはほぼ毎月一回のペースで会合を重ね2005年1月には理事長宛に「答申」を提出した。

同年4月からは開設準備委員会として活動を展開。11月7日にはプレ展示「花開く学生文化」を開催、2006年4月には、第一回運営委員会を開催し正式発足する運びとなった。

今後、学園関係資料の収集と整理・展示などの活動が本格的に始まる。学園・大学の個性を確認する作業としてしっかり位置付け進めていきたいと考える次第である。

(歴史資料館運営委員会委員)